



校長室の窓

令和8年7月16日

学校だより第4号より

～日常の中にある、これからの学び～

毎朝、子供たちがじょうろを手に、ミニトマトやキュウリ、アサガオなどに水をやっている姿を見掛けます。毎日世話をしていると、「昨日より大きくなった」「花が咲いた」「実が大きくなった」と、植物の小さな変化にも目が向き、世話を続けることが観察につながっています。

こうした姿を支えているのは、担任の日々の関わりです。担任が率先して世話をする姿を見せ、子供たちと一緒に水やりを続ける中で、子供たちは、言われたからではなく、「自分たちの植物を育てる」という思いをもって主体的に世話に取り組むようになります。

1・2年生にとっては、じょうろで水を運ぶこと自体も大切な体験です。水を入れたじょうろは思った以上に重く、中の水が揺れるたびに体も振られます。じょうろの傾け方が急なら水が上からこぼれ、勢いよく水を掛ければ土が流れ、植物を傷めることもあります。

どれくらい水を入れれば運べるのか、どのくらい傾ければちょうどよく水が出るのか、子供たちは実際に試し、次の水やりに生かしながら覚えていきます。水の量や重さ、揺れ方、力の加減など、教科書を読むだけでは分からないことを、失敗も重ねながら学んでいます。

身近なものに自ら関わり、試したり工夫したりする中で気づき、その気づきを次の行動に生かしていく。何気ない毎日の水やりの中に、これからの時代に求められる学びの姿が表れています。

間もなく夏休みを迎えます。特別な体験だけでなく、草花や生き物の変化、家の手伝いなど、日常の中にも学びの種はたくさんあります。子供たちには、身近なことに目を向け、自分から関わりながら、夏休みならではの気づきや学びを重ねてほしいと思います。